



Title	東南アジアを旅して（その二）
Author(s)	小林, 威
Citation	研究年報, (11), pp.191-202; 1970
Issue Date	1970-03-31
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10069/26354">http://hdl.handle.net/10069/26354</a>
Right	

This document is downloaded at: 2020-10-26T19:39:45Z

## 東南アジアを旅して

(その二)

小林 威

は し が き

この続篇を草するに当り、私の筆は大変重かった。その理由は旅行後既に3年以上を経過したために、東南アジアで受けた印象が大分色褪せてしまったからである。初めて異国を旅して、異なる風俗や情緒に出会った時は、非常に新鮮であった感銘が、いつしか薄れていくことは致し方ない。しかし、その後約1年の滞米生活と2ヶ月に亘るにヨーロッパ旅行を終えて帰ってくると、東南アジアで受けた印象がそれほど特異なものでなくなってきたからである。謂わば田舎者が小旅行をして得意気に旅行談をするように、私の観察は皮相なものに過ぎないという反省が絶えず私を苦しめた。

東南アジアを旅行した時、私は日本人と東南アジアの人たち、特に中国人との差異を認識して驚いた。しかしその言語構造からも推察できるように、日本人の思考態度や生活様式は世界でも特有なものではないかと考えるようになった。そこから上述の反省が生じたのである。

それにも拘らず、私は親しく話した外国人の言葉を伝えておきたいし、あわただしい旅行の中に受けた印象を書き留めておきたい気持が残っている。二、三の友人の慫慂に従って記憶の断片を便りに続篇を書くことにした。

## シンガポール(1)

マニラの暑気に驚かされた私は、シンガポールへ到着する前に覚悟をきめていた。そこは赤道をわずかに北に寄ったところであって、時は4月とはいえ一年中さほど暑さが変わらないだろうと思っていたからである。ところが案に相違して、シンガポールはマニラよりも遥かに涼しく快適であった。夜空に大きく輝く南十字星を仰ぎ見るとき、はじめて熱帯にいる感慨を新たにしてくれた。

1965年8月9日、突如マレイジャから分離独立したシンガポールは淡路島くらいの面積をもつ独立国である。独立の経緯はつぎのようにいわれている。それより約2年前、1963年9月に、シンガポールはマラヤ連邦、サバ、サラワクと共に、マレイジャ連邦を形成した。しかし、リー・クワン・ユーの卒いる人民行動党州政府と、アブドウル・ラーマン系

統の統一マライ国民組織とのあいだに、人種問題および対中国政策をめぐる深刻な対立が生じた。この内紛が急速に激化して、遂にシンガポールは突如独立を宣言するに至った。そのため、マレイジャとシンガポールの関係はかなり険悪で、住民や旅行者にもその影響が及び、経済発展を阻害する一因ともなっている。

私はフィリピンからボルネオを通してシンガポールへ旅行する計画を作っていた。シンガポールからは、ペナンで休息してバンコックへと脱ける旅程にしていた。しかし文部省の役人が手続を間違えて、マレイジャ連邦へのシングル・ジャーニーのヴィザをもらってきたのでやっかいなことになった。私の旅程では、マレイジャ連邦のボルネオにはいり、シンガポールへ渡り、再びマレイジャ連邦のペナンへと行くことになっていた。それには、シングル・ジャーニーのヴィザではいけないという。東京にあるマレイジャ大使館へ行けば、新たにヴィザを発行してくれるとのことだが、どういうわけか、旅券を入手したのが出発間際である。東京で駄目ならば、マニラの日本大使館で申請すればよいとのことだったが、面倒なのでボルネオ行きを断念した。マレイジャ連邦の住民が商用や遊びでシンガポールへ来る時には、ジョホール水道で旅券或いは証明書を提示しなければならない。逆に、シンガポールからマレイジャへ行く場合もそうである。

私は一週間ばかりシンガポールに滞在してペナンへ行った。その際、空港の税関でシンガポールで購入した品物に課税すると云われ、大いに抗議して免税になった。大したものを買っていないのだから課税されても高が知れていたが、理不尽な要求をされたから、それをはねつけたまでである。両国の国民感情が悪いから坊主憎けりゃケサまで式でそう云ったのか、それとも東南アジアのある種の国の税関吏のようにちょっとしたものが欲しくて云いがかりをつけたのか、真相は判らない。

ペナンを去る時にも、同じ係員がいた。私たちは、どちらともなく照臭そうに笑い合った。彼が、自分を憶えているか、と問うので、勿論さ、我々はいわば友達じゃあないかと答えた。彼は「ウィーアー フレンズ」と繰返し心に云いきかせているようだったが、浅黒い顔に白い歯をいつぱいのぞかせて「貴方のいうとおり私たちは友人だ」と云ってこぼれるような笑いを湛たえて握手を求めてきた。ペナンの印象を尋ねるので、大変すばらしかったと答えながら、私は真珠のタイピンを抜きとって云った。「ペナンはインド洋の真珠といわれている。白い砂を真赤に染めて海へ落ちてゆく夕陽もすばらしいし、ペナン・ヒルの眺望もよかった。食物も旨かったし、今はいい印象だけが残っている。君と知合った記念にこの真珠をあげよう」。いさゝか惜しい気もした。しかし私は、2日前にこの男に対して「お前じゃ埒があかないから上役を連れてこい」と暴言をはいて金線入りの服をきたオフィサーを呼んで交渉した非礼を詫げる気持もあった。

彼は「テンキュー、テンキュー」と云って真珠に見入っていた。マレイ訛りなのか、ビジン・イングリッシュか知らないが、ペナンではタクシーをT E X Iと書いてある。私は日本語の模造言葉テクシーを連想して面白かった。また、テレフォン・ブースにはT A L

I P O Nと書いてある。この種の単語には随処で出会った。シンガポール大学の正門にも UNIVERSITI SINGAPOURAと書いてあったように記憶している。こういう英語は珍奇に映り、そしてピジン、イングリッシュは奇妙な英語に響くが、そうだからと云って、彼等の英語がでたらめだという結論は導かれるまい。

東南アジアを旅行した多くの日本人は、かの地の英語が判りにくいと不満をもらすが、そうだからとてその人々がクイーンズ・イングリッシュやジェネラル・アメリカンで話されてよく諒解できるかと云えば、なかなかそうはいかないであろう。言語の有する意志伝達機能を重視するならば、我々は彼等がそういう英語を操りながら英語国民と意志を疎通している点に留意すべきであろう。

## (2)

サンスクリットの Singa Poura から転訛してシンガポールと呼ばれるこの都市は、原義で獅子の町を意味している。マレイ語では Gemasek (海の町) と云い、かつてはイギリスの東洋拠点の重要な位置を占めていた。後述するラフルズが到着した時、シンガポールは漁港でマレイ人の漁夫が150人しかいなかったと云われるから、150年間に人口が1万倍以上に殖えた。人口増大の主因は、大陸より移住した中国人に帰せられ、現在、総人口の4分の3を中国系が占めている。

東南アジアを旅行した私は、主要な都市に中国人が進出して経済の実権を握り、更に政治をも掌握している事実を具さに知った。フィリピンでは中国人に商業活動の核心を押えられることを危惧して、彼等の活動を制約する法案を制定したが、名義だけをフィリピン人にして実権は中国人が依然として握っているという話を聞いた。シンガポールは、表面的には中国人の町という観を呈している。

中国人および中国系シンガポール人は、その出身地によって職業が固定化しているといわれる。福建省出身者は、主として金融・貿易・回漕業等を営み、概して資本金も大きく政治的発言も大きい。これは、シンガポールへ流出した中国人は福建省出身者が先発移民であり、かつ、その数が多いことによる。これに対して広東省出身者は、食堂・マーケット・小売業・遊興場等を経営している。中国人のシンガポール移植は、戦争により拍車がかげられた。特に太平洋戦争の戦塵を避けてシンガポールに逃がれてき人々が多く、出張移民的性格から定着化する傾向になった。

中国人がある地域へ進出して累増する理由は、その相互扶助意識が強固な点に起因している。たとえばアメリカの都市を歩いていると、随処で中国人に出会うし、一応の都会の体裁を整えているところには、必ず中華料理店がある。中華料理屋で働いている料理人でも給仕でも、これすべて中国人である。彼等の大部分は台湾からの新移民で、観光ヴィザ或いは学生ヴィザ等を受取ってアメリカへ来る。しかしその目的は定着移住にあるので、技能をもたない者は中国人の扶助組織を通じて、料理屋へ雇われたり、チャイナ・タウ

ンの売子になる。そして、移民局に申請してPR（永久滞在保証書）を得るために努力する。

ニュー・ヨークで世話になった中国人（仮にその名を林さんとしておこう）の例を挙げよう。彼は台湾大学を卒業後、日本の一流大学の大学院の修士課程を修了してその後2年ばかり日本で働いてから渡米した。林一家がサン・フランシスコへ到着した時は、生活費にも窮乏するほどであった。学生ヴィザで渡米した林さんは、成人学校へ籍をおくと同時に、就職先を探しまわった。しかし中々恰好な就職が見つからず、時には皿洗いの広告を見て応募したこともあった。サン・フランシスコに見限りをつけた林さんは単身ニュー・ヨークへ赴き、そこで定職を得た。彼は早速妻子を呼び寄せて、コロムビア大学附近の古アパートで生活している。技術者である彼の年収は約1万ドルであるから、もう少しましな住宅へはいれるが、ある目的のために生活を引締めている。林さんの奥さんは洋裁ができる。現在のところ、下請内職をしているが、行く行くは独立して店を開く予定にしている。その開店費用にできるだけ貯金しているのである。自立すれば台湾から縫い子と呼ぶ手筈にしてある。

林さんは彼の勤務している会社に2人の中国人を入社させたし、奥さんの友人にもタイピストの仕事を見つけてやった。いろいろな情報交換を居住地区の中国人会でやっており、自分の力に余る時は、会を通じて相互扶助をする。この中国人会はレクリエーションを催したり、生活権の保証に努力したり多面的に活動している。このように林一家を例にとっても、一人の中国人が移植すると、それを軸として友人や親族が殖えてゆく。

単なる旅行者である私には、シンガポールの中国人がどのように増加していったか、その経緯を明らかにすることができなかつた。類推的に、林さん一家のような形態をとっても増殖したのではないかと想像するだけである。

華僑が勢力をもつのは相互扶助が盛んであることのほかに、彼等が孜孜働らく点が挙げられよう。昼下りに裏町を歩いているとマレイ人はのんびりと樹陰で暑さを避けているのに比べて、中国人は水を道路に撒いたりして何くれとなく働いている。これと似た光景はマニラでもバンコックでも見た。

### (3)

私が3年前にシンガポールを訪れた時、同国の工業化は余り進捗していなかった。その一つの理由として、マレイジャと分離独立した点があげられる。一つの国が別離して二つの国に別れると、国民感情が尖鋭化する宿命がある。シンガポールの工業化で最大のガンはジョホール水道での関税だと云われている。何しろ人口200万程度の一小島であるから市場が小さい。工業製品を輸出しても関税障壁がある。また華僑の資本も60年代から産業投資にまわされてきたが、十分とはいえない。むしろ自由港である点を利用して世界各国から商品が流入しており、パーカー万年筆と並んで英雄牌万年筆が陳列されている。

日本製の品物も店頭には数多く見られ、単純な旅行者ならば感激するかも知れない。しかし、問題は、輸出の方法である。日本の商社では競争会社のシェアを奪うために、値引きを行なうことが常識となっていると云われる。これに対して、外国人特にドイツ人は実にガッチリと利潤を得ており、対照的である。商社ばかりではない。日本の製造会社も輸出の場合に、どれだけの利潤を得ているか疑問である。アメリカの西部海岸に日本の乗用車が進出しているが、アメリカでの販売価格から逆算してFOBが非常に廉価なことが判る。一方、フォルクスワーゲンも国内価格よりもかなり高い価格で売られている。

後進諸国の関税障壁が高いと、現地資本との合併企業を設立して進出するようになる。わが国の東南アジアに対する累積投資額は、昨年3月までに3億4,666万ドルに達した。シンガポールへも日本から投資が行なわれているが、市場調査の不足や提携先が不良であるために、未だ十分の効果を上げていないようである。丸善石油は進出が早かったが、この例に洩れず失敗した。またブリジストンは操業率が3割程度であった。その他の大企業としては、石川島播磨重工業のジュロン造船所がある。

外国へ進出した企業の失敗・成功を判定するには長期的視野を必要とするが、丸善石油の場合には明らかに失敗であった。プリティッシュ・ペトロリアムやシェル石油が絶対の地盤を有しているシンガポールの石油界へ丸善が進出した意気は壮だが、意気だけでは事業にならない。それに加えて同社は本家の方がお手あげになってしまったのだから、どうにも致し方なかった。

企業進出には、このほかに相手国民の教育水準と技術水準といった制約が存在する。ジュロン造船所のケースでは、修・造船の技術者や熟練工を大量に育成することからはじめねばならなかったという話である。このような地味な努力から始めて、技能者を養成し、組織的な人間を訓練することが可能となるであろう。また造船の場合には、現地に関連産業を育成して工業化の波及効果を生みだすことが可能となるであろう。この種の投資が東南アジア進出の際に必須である。無駄に見える投資が、実は最も必要とされる投資なのであり、このような現地でのたゆまぬ努力が相互理解への道を拓いてゆくことになる。

シンガポールへ企業が進出する場合、先進的地位を占めているイギリスの企業と、最近の進出が著しいアメリカの企業との競合を考慮しておかねばならない。シンガポールにある「アジア・ドル市場」はバンク・オブ・アメリカを中心とした米系銀行の手でつくられた。電子工業の進出ではI.C.で有名なテキサス・インスツルメントやジェネラル・エレクトリック等もあり、この系列会社がすでに15社も誘致されている。このほか航空機整備を目的としてロッキード、東南アジアの農業機械市場を目指してキャタピラ、更に出発事業のマクグロウ・ヒル等も進出している。石油企業ではカルテックス、エッソ等がシンガポールを拠点として東南アジア全域への進出戦略をねらっている。このように種々の産業分野において、わが国の資本進出の前途には多難な局面が予測される。

繊維関係では帝人が合併企業の形で現地工場をもっているが、日本からの輸出品と中国

製品との間に、すでに競合関係が出ている。中国品との関係では、繊維の他に、雑貨類の生活必需品や軽工業部門で競合している。

わが国と東南アジア諸国との関係を順調に進展していくには、ジュロン造船所でみた例のような現地でのたゆまぬ相互理解への努力が必要であろう。更にアメリカ及び中国との競合を如何に調整していくかという大きな課題が残されている。

最後に触れておきたいことは、現地でのナショナリズムの問題である。現在わが国では東南アジア諸地域に合併企業が進出したり、あるいは加工を目的として系列会社を作っている。現地での国益にマッチする限り、これらの企業が友愛的に受容れられており、かつタイ等のように親日的な動向が見受けられる。しかしタイにしても最近では日本企業の進出が急テンポのために、かなり警戒心を起しているようである。親日的にみえる政府自体が、時には民衆のナショナリズムを利用して、反日に豹変することも十分に予想される。この点のほかに、中華人民共和国と華僑との関係である。中国がもっと柔軟な態度を示しだしたとき、華僑と大陸との関係が密接になることは確実であり、流通の末端機構を把握している華商と、現在のような日中関係をもっている日本との関係は非常に微妙なものとなるであろう。

#### (4)

西インドのジャマイカ島沖合を航行中の一船舶内で孤々の声をあげたサー・トマス・スタンフォード・ラフルズの名前を措いて、シンガポールを語ることはできまい。彼はイギリス東インド会社に入社後、マラッカ、ジャヴァを始めとして東南アジアの植民地経営に当った。1819年、ラフルズはシンガポール島を開設した。それは世界最初の自由貿易原理に基づく自由港であった。その歴史を背景として、現在のシンガポールは香港と共に、世界でも数少い自由港の一つである。

ラフルズは疎腕で名高いイギリス東インド会社の一社員としては、特筆すべき自由思想の持主であった。彼はアダム・スミスの理論を、植民地経営に実践したといわれる。既に彼は、フランス領であったジャヴァを占領して、その地に商業の自由活動、農民の耕作の自由などを認めて封建的賦役を廃止し、金納地代による小作制度等を導入した。このような改革を行なったラフルズは、ロンドン条約でジャヴァがオランダに返還されることが決まったので、失意と憤慨の裡にこの地を去り、シンガポールを買い受けてそこに一つの理念を実現すべく努力した。

ラフルズはシンガポールの奴隷制度を廃止し、とばくを厳禁し、アヘン吸引を禁止し、商活動の自由を認めた。ラフルズの植民地経営が異色であった理由として、それが彼の世界観によるものなのか、或いは本国で定着しつつあった産業資本の趨勢を反映したものであるのか、私は知らない。何れ機会を見て、ラフルズの生涯と思想について研究してみたいと思っている。

一日、ラフルズの筆蹟を見た。それは細長い書体で、整然とした清澄さがあり、すきを見せない厳しさを有っていた。多分、彼は内剛の人であり、自己の信ずるところを打樹てようという意欲と情熱に燃える改革者の一面を有していたのであろう。彼は、社会や人間をより正しきものに、より高いものに導こうとするところの教訓的傾向をもっていたのであろう。

一方、彼の所属するイギリス東インド会社は、組織が固定化して環境の変化に應じ得なくなっていた。即ち、マーカンティリズムの世界的商業戦に勝残り、フランスおよびオランダの東インド会社を駆逐したイギリス東インド会社は、インドにおけるイギリス支配の基礎を固めた。同会社は地租収入を主とする租税取立てを目的として、徴税、司法、治安の任にあたる官僚機構を構成してインド経営に専念した。イギリス東インド会社が如何に巧妙を極めて巨額のインドの富をロンドンに送り出したか、その搾取過程については更めて述べるまでもない。

隆盛を極め、専横を恣にしたイギリス東インド会社も、内部腐敗によってやがて崩壊への道を辿ってゆくことになる。社員の私利、汚職によって会社経営が多額の赤字を計上するようになり、同社はイギリス政府に援助を申し出て政府の監督下におかれるようになる。セポイの反乱によってイギリス東インド会社が解散するまでにはなお50年を必要とするが、1813年の特許状更新の際に、同社は貿易独占権を手離さざるを得なくなっていた。

イギリス東インド会社内部の動脈硬化症と、新しい時代の流れに押流されて同社が解消する状況は、歴史の中に散見されるところのある体制が崩壊して新しい体制が出現する事情に相似している。その崩壊する組織の中で、環境の変化を敏感に感知して新しい組織の芽を育くもうとする者も一つの仇花に過ぎない。

ラフルズの名を冠したホテルのエリザベス・ホールで、私は水割りのスカッチを飲みながら、昼間見たラフルズの筆蹟を思い出して彼の苦悩を想起していた。彼は晩年に、奴隷解放措置を違法として裁判所に告発され、死後にも未亡人は追徴金を課せられた。18世紀末から19世紀初頭の転換期に僅か45才の生涯を閉じたこの為政者は、遂に孤独の人ではなかったのではなかろうか。スミスの構想した市民社会が、決して自由競争原理をテーゼとする社会をもたらさなかったのと同様に、ラフルズの死後40年を閲して、シンガポールはイギリス植民省の管轄となり、同国の東南アジア拠点に化した。私は組織と個人について考えながら、落着いた雰囲気の中に豪華に飾られた室内をぼんやり眺めていた。

## バ　ン　コ　ッ　ク

### (1)

アルヴィン・H・ハンセンが来日して講演をした時に、インドで経済発展に一番必要な



ものは、経済援助でもなく外国資本による産業投資でもなく、教育投資である、と述べた。東南アジアの諸国を廻っていると、義務教育がどこまで徹底しているか疑問になる。香港の辻でも、マニラの街路でも、シンガポールの表通りでも、10才に満たぬ子供たちが商売をしている親について遊んでいる。いや、時には子供たちが商売を手伝っている光景にも出会う。この風景は、バンコックでも同様である。世界で最も義務教育が徹底している国は、日本ではなかろうか。教育環境の点を別とすれば、義務教育が最も進んでいる国は、日本だといえる。

アメリカの大学は数量でも規模でも学生数でも世界一である。しかし、義務教育を受けない人間が多数放置されていることも事実である。それは、黒人を中心とする少数民族と南部の貧乏白人の存在である。アメリカの都会を歩くと、特に黒人の子供たちが昼日中遊び呆けているのに出会う。現在、アメリカで人種問題が尖鋭化している原因の一つに、黒人の不就学が挙げられる。この点をおある有識の白人婦人に質したところ、彼女は撫然として答えた。「私たちは教育の機会に差別をつけないのに、大体彼等には義務という観念がないから、小学校を途中でやめてしまい、長ずるに従って犯罪を犯したり失業者となるのです」。また、コロンビア大学で知合ったある女教師は云った——彼女はシカゴの小学校教師で、夏期講習のために同大学の教員養成学部へ来ていたのだったが。「黒人の小学生といったらお話になりません。授業中は騒いで勉強しようとしなしい、休み時間には悪戯ばかりしています。それを注意すると先生に殴りかゝってくるのですから。私だって殴られたのですよ」。こんな話を幾つか聞くと、黒人は全く手に負えない民族で、アメリカ社会の公序良俗を一手に破壊しているように響いてくる。

しかし原因はほかのところにある。あるアメリカ人と人種問題について話をし、談たまたま教育問題に触れた時、彼は次のように云った。「教育の均等といっても問題は質です。教育委員会は白人で占めているから、白人地区の学校は優秀な先生を揃えて立派な設備を持っています。それに引換えて黒人地区の学校の設備といったら非道いものです。黒人の子供たちが小学校3年生ぐらいから次第に学校へ行きたがらなくなるのも無理はありません。私たち白人は一般的次元で黒人の小学生を批判するよりも、この現実を直視して歪んだ現実を匡さなければなりません」。

良心的に白人の仕打の非を反省するアメリカ人もかなり多い。しかし論理的に差別の非を悟っても、現実的には改善がなかなか行われぬのが事実である。サンフランシスコの近傍にあるパークリーでは、白人地区と黒人地区の小学校のディスセグレーションを施行して、低学年は全員黒人地区の小学校へ、高学年は全員白人地区の小学校へ通うようになった。これに対して、原則は賛成だが、子供たちの学力が低下したら困るという心配を訴えた親が多数いた。パークリー方式は全米で初めての試みだけに、期待と危惧とをもって注目されている。

東南アジア諸国の不就学児童の存在が、国民性によるものなのか、設備不足によるもの

なのか審かでない。バンコックでは小学校の入学年齢が7才であるが、4～5才でも入学できる制度となっている。就学希望者が多いが、学校数が少ないためにスシ詰め教室である。最近では教育投資が大分行なわれるようになったが、教師が不足のために拡張し難くて、スシ詰め教室が解消できない。そこで高学年へ進む頃から中退者が出てくる模様である。教師不足は特に田舎の部落で激しいそうである。

中学校以上になると、更に学校数が不足してくる。一応中学校へ行く者は進学希望者が多いから、一般教育を中心にカリキュラムが組まれているが、実務教育の必要を力説するタイ人もいる。たとえばテレビジョンがこわれれば、極く簡単な修理でも3週間以上かかるそうである。またちよつとした機械の修理にも相当な日数を必要とし、このため工場が運休することもあるそうである。つまり、初歩の電気技手や機械修理工が養成されていないために、隘路が生じている。かような現実だから、大学教育を充実する前に、実業教育を主とした中学校或いは高等学校が必要だというのである。

大学教育が十分に行なわれているかと云えば、これまた大変寂しい。国立大学が7校あるが一学年で8,000人しか収容できないのに入学希望者は3万人を超える。私立大学がないから、不合格者を収容する場所がない。それに総合大学の形態をなしているのは、チュラルンコン大学一校だけで、後は単科大学若しくは少数、学部の大学である。現在、シェンマイ、コスケン、パタニに技術系の大学があり、地方分散が望まれている。以上のように、タイの教育投資は今後活潑に、大規模になされる必要がみられる。

タイの大学教授には兼職をしている人が多い。タマサート大学の経済学部長プライ博士は国立タイ銀行の総裁を兼ねており、クートゥラ博士もタイ銀行の要職にある。同大学で財政学を教えているスクム氏は、予算局の調査部長をしている。

タマサート大学は経済、法律、政治を中心とする学部なので、私はスクム氏に会いに行ったが、予算局にいると云うのでそちらへ行くと会議で忙しくて遂に会えなかった。聞くとところによると、財政学の専門家は、チュラルンコン大学の経営学部にいるチョムチャイ博士だとのことだが、氏は旅行していたので遂に会えなかった。

これらの教授のうち学位を持っている人は、欧米特にヨーロッパへの留学者が多いそうであるが、最近ではパースにある西オーストラリア大学やアメリカの大学へ留学する学者が増えている。その理由は、オーストラリアやアメリカの大学で奨学金を支給するからである。理論経済学を専攻したアクラサネ氏は西オーストラリア大学から帰国したばかりであったが、一年後にはアメリカへ行くと話していた。氏に日本の大学は魅力がないかと尋ねたところ、日本は余り募集をしないし、それに日本語を覚えるのに時間をとられるからつまらないと答えた。アメリカではフォード財団その他が多額の研究費を、大学に提供しており最近では特に東南アジア関係の支出が増加している。

シンガポール大学のリー教授と会った時、私は前学部長の坂口教授から依頼されて交換教授の件を打診した。それに対して、公文書で問合せがないから責任ある返事はできない

が、滞在費の点に支障があることを指摘した。

リー氏は明確に云わなかったが、シンガポール大学の教授は月収500米ドル程度の給料であるらしい。交換教授として日本に来れば、少くとも同額の所得を保証して欲しい。それに言語の垣根があるし、長崎の大学とシンガポールの大学が提携しても、どれだけのメリットがあるか判らないと非常に消極的であった。

学問の交流と一言で云うが、それには十分な資金的裏付があり、研究題目が相互にメリットがなければ実現が難いであろう。台湾を含めて東南アジア諸国は、日本に対してギヴ・アンド・ティクの状態よりは寧ろティク・アンド・ティクを求めているように思われる。わが国の大学と東南アジアの大学が提携する場合に、一大学が独自に行なっても実現の可能性が非常に低く、どうしても政府ベースで行うか或いは東南アジア貿易若しくは現地で生産工場を有して利潤を上げている企業がファンドを提供して行うかしない限り、社会科学および人文科学関係では無理だということを痛感した。

## (2)

マリは小柄ですらりとした女子学生であった。タマサート大学で経済学を勉強しており、卒業後アメリカに留学する予定になっていた。マリという名前の発音は英語のメアリよりも仏語のマリに近く、それは花を意味するシャム語だということだ。大学の建物というよりも寧ろ寺院のように見えるタマサート大学のキャンパスで知己になってから、私はマリとタイの国情、国民性、思考様式、風俗等について話し合った。彼女は初対面の私の面前で、自国の欠点を平気で批判した。

彼女は最初からアメリカの大学へ行きたかったが、高校卒業で渡米すると言葉の点でハンディ・キャップがあるから、タマサートで大学を卒えて渡米することにしたそうだ。街の見物をさせてもらったお礼に、オリエンタル・ホテルで昼食をおごった。メナム河に面したテラスがあり、そこは微風が快く頬を撫でて気持のよい場所であった。食後ふと見ると、数名のアメリカ人がホテルの真下で泳いでいる少年たちに投銭をして、面白がって写真を撮ったりしている。

「あの光景を見て何んとも思いませんか」私は尋ねた。

「そこで投銭をしているアメリカ人は旅の余興で楽しんでいるでしょう。それに、あの子たちはあゝやってお金を稼いでいるのだから、別にどうってことはないでしょう。私がアメリカ人のところへ行って、タイ人を軽蔑するのはお止めなさいということは簡単です。でもそうすればアメリカ人はバツの悪い思いをして不愉快になるでしょうし、子供たちはお金を稼げなくなって私を恨むでしょ。だから、干渉しない方がお互いの為になります」。マリは続けた

「私はタイにいる男性に余り魅力を感じないのです。彼等は因習的で怠情です。たとえば、川を漕いでいる小舟をごらんください。櫂を漕いでいるのは大抵女で、男は船へ座ってタバコを吹かしているでしょう。役所へ行ってごらんください。午後は樹陰へ椅子を出して

ゆっくりと執務しています。更に困るのは適材適所でないことです。大学の教師でも、勉強意欲に燃えているのは留学後間もない人たちですが、あの人たちにはインストラクターくらいしか席があいていません。そこで、外国へ行ける機会があれば再び出かけてしまつて、私たちは彼等から新しい知識を学ぶことができないのです。今、この国では教育の充実が最も必要なのに、有能な教師が少くて必要が満たされません。結局、もっと勉強しようと思えば、そして資力が許すならば、外国——特にアメリカへ留学することになります」。この後マリは大学教授の兼職について相当辛辣な批判をした。

次いで彼女はアメリカとタイとの関係に話題を転じた。彼女の話によると、現在タイ国がアメリカと親密な関係をもってヴェトナムに派兵したり、基地を提供したり、SEATOの本部をバンコックに置いているのは、決してタイ人が好戦的だからではなく、親米一辺倒だからでもなく、反共に凝り固まっているからでもないそうである。戦争中に対日協力をしてきたピブン政権がある一方、日本の敗色が濃くなれば自由タイ政府をつくって戦後に備えたように、現下の世界状況から判断して、所謂自由諸国側につく方がタイの利益になるからそうしているのだということである。タイ人の多くは、これが小国の宿命であり、現前の利益を追及するのが得策だと考えているが、これは一種の乞食根性である、とマリは極めつけた。こういう点が彼女には我慢できかねるらしい。

タイは太平洋戦争中に日本へ協力して戦火の災害からは免れたが、タイ円の交渉では僅かの補償金しか得られなかった。一つの陣営に属することは短期的には利益があるかも知れないが、長期的には必ずしもそうだとは限らず、しかも取引としてヴェトナム派兵をすることは、大変危険だと彼女は考えていた。

マリは急に日本の歌を知っていると云ってハミング始めた。それは戦争中につくられた「愛国の花」という歌だった。凡そメロディと歌詞とかけ離れたこの歌は、確か女子挺身隊のために作られたものだ。マリが歌詞の内容を質ねたので、「よく憶えていないが、確か前半は、どんなことがあっても白雪におおわれた富士山のように美しい気高さを心の支えとして生きていきたい、という歌だ」と答えた。

「おお、乙女の願いですね。それならば、もっと軽やかさがあっていいのに、厳しい時代に作られたものだから、壮重な響きになっているのでしょうか。でも、良いメロディですわ」

そう云いながら彼女は問いかけるように円らな瞳で私を見た。

## 香 港（その二）

旅の帰路にも香港に立寄った。ある日お茶を飲んでいると、ボーイが来て「あなたは日本人ですか」と聞くので「無論そうだ」と答えた。すると「あちらにいる方がお話ししたいが構わないか」と尋ねたと云う。その方向を見ると中年の恰幅の好い白人が親し気に会

積したので「別段構わない」と答えて、彼の席へ移った。

彼はオーストラリア人で飛行機の操縦士だったが、朝鮮戦争に従軍して腿に貫通銃創を受けた。野戦病院に入院しているあいだ、最初は北朝鮮の人間に限りない憎悪を燃やした。しかしそのうちに、何故自分は負傷の身を癒さねばならなくなったのかと考えるようになった。ここで重大なことに気付いた。オーストラリアは朝鮮人民共和国に対して宣戦布告をしなかったのに戦闘行為に加わったことだった。彼は悲痛げに云った。

「私は本国で乗客を運んでいたのに、朝鮮では橋を爆撃したり建物を破壊したり人家に焼夷攻撃をして無辜の人民を殺し、傷つけたのです。その結果、私は片脚を失ってしまいました。もう一度飛行機を動かしてみたい。オーストラリアにいた時のように旅客を運ぶために。でも、もうこの身体では、これでは何もできません」

傷痍の身を養いながら、彼は祖国を憎悪するようになった。故国へ帰ることを肯んじなかった。白人特有の意志の強さをもって、自己の信念に忠実な生活をおくるために、彼はここ香港の地に定住することになった。彼は英語しか話せないので亡命の地を求めれば香港以外にゆくところがなかった。彼は中国人を娶り年金で生活している。

彼の反米感情は相当に激しかった。もとはと云えば、彼が戦争に参加して祖国を失う結果をもたらしたのは、アメリカの極東政策によるものである。

「アメリカ人はろくなことをしとらん」彼は吐きすてるように云った。朝鮮で戦争を起し、ラオスで騒動を掻きたて、また懲りずにヴェトナムに足を突っこんだ。貴方がた日本人は、特に若い日本人はアメリカのやり方に追随してはいけません。そんなことをしていたら、今にとんでもないことになります」

こう云った後で彼は日本人の対米感情や、再軍備に対する日本人の反応やヴェトナム戦争に対す日本人の考え方について質問した。彼は心底から日本が戦争に巻き込まれることを危惧しているのだった。一介の外国人が日本について相当な警戒心を抱いているといえ、奇妙に響くかも知れない。しかし東南アジアを廻って私は幾人もの人々から日本の軍国主義復活の可能性について、質問を受けた。特にシンガポールで会った五、六の中国系シンガポール人は日本の再軍備の進展に関して、厳しい警戒の念をもっていった。今後の東南アジア進出に際して、この地域の住民にはかつての「大東亜共栄圏」の悪夢が残っており、なおも消えぬ疑惑の眼をわが国に対して向けていることを十分に承知しておく必要がある。

私の耳朶にはこのオーストラリア人の言葉が未だに残っている。

「私は無意味の戦争に参加して殺戮を重ねました。私の残された生命は贖罪のためにあるのです。私の後の世代には、私の二の舞をさせたくない。それを希求しつつエグザイルの生活を送る。これが私の贖罪です」。

気がつくやうに中年の中国婦人が彼の横に立っていた。彼は私に大きな手で握手を求めると杖をつきながら片腕を奥さんに托して足をひきずりつつ去って行った。